

「ここに愛がある」

ヨハネの手紙一 第4章7～12節

日本基督教団 滝野川教会牧師 東野尚志

「心に響く聖書の言葉」。このテーマでシリーズ礼拝が行われています。今日はその 8 回目となります。秋学期の全学礼拝が始まってから、既に 7 回、皆さんは、心に響く聖書の言葉を聞き続けてこられたわけです。今日の御言葉もまた、皆さまの心に響くことを願っています。いや、先ほどこの御言葉が朗読されたとき、もう既に、皆さんの心に響いているのではないかと思います。それならば、もう私が話をする必要はないかもしれません。しかし、朗読された御言葉が、さらに豊かな響きを生み出すことを願って、一緒に、味わっていきたいと思います。

先ほど、司会者に朗読していただいた聖書の箇所には、一つの大きな特徴がありました。皆さんも、すぐにお気づきになったはずですが、ヨハネの手紙一の第 4 章 7 節から 12 節まで、わずか 6 つの節からなる短い段落ですけれども、この中に、「愛」、「愛する」という言葉が、何度も何度も繰り返して出てきました。日本語の漢字で、「愛」という言葉を拾い上げてみると、何と 15 回も現れます。各節に、平均して 2 回以上、愛という言葉が出てくることとなります。この箇所の主題は、明らかです。新共同訳聖書は、ここに「神は愛」という見出しをつけました。そして実際、「神は愛である」と言って、はっきり宣言する言葉が、ここに刻まれているのです。

「神は愛である」。私たちはこの宣言を、どのように聞くことができるでしょうか。振り返ってみれば、人類の歴史の中で、「神は愛である」という信仰の告白は、絶えず大きな問いにさらされてきたのだと思います。とりわけ、20 世紀という時代の中で、あの世界全体を巻き込んだ戦争の悲惨の中で、「神は愛である」という信仰に対して、深刻な疑いが差し挟まれました。「神は死んだ」と口にする者も現れました。あのアウシュビッツの悲惨の中で、神を問う真剣な問いが重ねられたのです。なぜ神は、このような悲惨な出来事を見過ごしにされるのか。神が愛であるというなら、なぜこの歴史の中に介入して、神を信じているユダヤ人たちを救ってくださらないのか。あるいはまた、礼拝中に、大きな地震に襲われて石造りの教会堂が崩れ落ち、多数の死傷者が出たというニュースが伝えられる。すると、私たちの心はざわついてきます。なぜ神は、ご自身を礼拝している民を、お救いにならなかったのか。神が愛であるというなら、なぜ、信じる者を平気で見捨てておられるのか。そのように問いながら、「神は愛である」と告げている聖書の言葉に疑問を抱き、神を信じることにむなしさを感じていくのです。

この神に対する問いは、日本においても、私たちに襲い掛かってきました。今から 8 年前、2011 年の 3 月 11 日、東日本を襲った大地震と、それに伴う大津波によって、多くの命が失われました。また原発の事故によって、故郷を追われた人たちが続出しました。そういう悲惨な出来事に直面すると、「神は愛である」と告げる聖書の言葉が、どこか遠い響きのように感じてしまいます。空しい、無力な言葉のように思ってしまうので

す。今からひと月前には、台風 15 号が関東地方に上陸して、千葉県を中心に大きな被害をもたらしました。そして、明日の午後にはまた、台風 19 号が関東地方に迫ってきます。まだ被災の痛手から立ち直っていない人たちがたくさんいるにもかかわらず、容赦なく新たな脅威が迫ってきます。日常の生活が成り立たなくなつて、途方に暮れている人たちに対して、聖書は何を語るのでしょうか。そこでは、「神は愛である」という聖書の言葉が、急に色あせてしまったような思いを味わいます。そして何か、新しい別の言葉が語られなければならないのではないかと思ってしまうのです。

しかし私は思います。旧約聖書以来、聖書の民が見つめてきたのは、まさに、そのような悲惨な出来事の連続であつたに違いないのです。自然災害による悲惨だけではなくて、戦争やテロによる流血といった、人間の罪がもたらす悲惨を見つめ続けてきたのです。聖書は決して、神の愛に守られた理想的な神の民の姿を描いてきたわけではありません。この世界の悲惨な現実をはっきりと見据えながら、なおそこで、「神は愛である」と宣言したのです。

ヨハネは、「神は愛である」と語りました。そして、さらにはっきりと、「ここに愛がある」と語りました。そこで、ヨハネが何を見ているのかを、私たちは知らなければならないと思います。ヨハネが、はっきりと指差している「ここ」とはどこでしょうか。ヨハネは言います。「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償いけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります」。ヨハネは、はっきりと、十字架の主イエス・キリストを指差しながら、「ここに愛があります」と証しているのです。

神は、私たちが神から離れていってしまうこと、神の恵みから落ちていってしまうこと、そしてもはや神の恵みの力を期待しなくなり、神に望みを置かなくなってしまうことを、そのまま放置しておくことができないほどに、私たちに激しく求めておられます。そして、ご自身の独り子であるイエス・キリストを私たちのもとに遣わして、罪の力に捕らわれ、罪の中に失われていた私たちを探し求め、見つけ出してくださいました。主イエスご自身もまた、もはや誰からも愛されていないと思い込み、絶望し、自暴自棄になっている者たちの傍らに立ち、ご自身のはらわたが痛むような愛をもって、私たちに手を差し伸べ、十字架の傷を刻んだその御手によって、私たちがしっかりと支えてくださるのです。「ここに愛がある」。「ここに愛がある」。私たちに絶えず襲い掛かってくる虚無の力、私たちが飲み尽くそうとする罪と死の力に対して、主が既に勝利しておられることを信じ、「ここに愛がある」と告白することができるのです。

人間の罪がなおも争いや悲惨を引き起こし、自然災害や病や事故に巻き込まれ、死の力が私たちの望みを奪いそうになるときにも、私たちが見つめなければならないのは、他のどこでもない。私たちが聞かなければならないのは、他の何でもない。主イエスの十字架の救い。そこにはっきりと現され、刻み込まれた神の愛です。神は私たちが愛し、私たちが失われていくことをおゆるしになりません。神は御子イエスに血によって、私たちをご自分のものとして買い取ってくださいました。この神の愛の中に、私たちは今、しっかりと包まれているのです。そのとき、私たちは気づくはずで、同じようにして、キリストによって見出され、神によって愛されている仲間が与えられている、ということ。そこに、私たちが愛すべき隣り人を見出していくのです。そのように互いに愛し合う交わりの中に、神が共にいまし、神の愛が全うされます。そして、ここにこそ、すべての間

いに対する究極的な答えがあるのです。究極的な解決は、否応なく力で力をねじ伏せようとして実現するものではありません。神の愛が私たちの心の中に、そして、私たちの間に力強く働いて、まことの平和を作り出してくださるのです。

「ここに愛があります」。それはまさに、私たちが礼拝をしている「ここ」であると言ってもよいと思います。神が共におられ、神の御言葉を聞く、礼拝という場所です。どんなに悲惨な現実によっても、決して、むなしくされることのない神の愛を、神の愛の御言葉の響きを、しっかりと聞き取ることのできる信仰の耳を、主が豊かに育ててくださいますように。皆さんお一人ひとりの上に、心より、神の愛と祝福をお祈りします。

2019年10月11日 聖学院大学 全学礼拝シリーズ礼拝「心に響く聖書の言葉」